



様々な感染症が同時流行！

いきなり高熱がでた。鼻水、咳が日増しにひどくなる。高熱が続いて下がらない。突然の嘔吐でぐったり。6月はこんな症状を訴えるお子さんが小児科の外来を多数受診されました。いくつかのウイルスの感染症が同時に流行したようです。特に目立ったのがRSV感染症とヘルパンギーナを含む夏風邪でした。

鼻水、咳、熱で始まり、咳が日増しにひどくなる、高熱と激しい咳で夜眠れない。2歳以下で、このような症状があればRSV感染症が疑われます。0歳児は重症化しますので、早期に病院を受診してください。

突然39℃を越える熱がでた、熱の割に元気、でもあまり食事をとらない。未就学児でこんな症状があれば喉に水疱ができるヘルパンギーナかもしれません。喉に水泡がなく、高熱だけのタイプは夏風邪と診断されます。高熱の夏風邪では脱水予防が重要です。発熱時は水分補給をこころがけてください。そのほかアデノ、パラインフルエンザ、溶連菌などの感染症も報告されています。このようにさまざまな感染症が同時に流行したことはあまり記憶にありません。3年間のコロナ対策で他の感染症の流行が抑えられてきた反動ではないかと考えられています。

コロナがじわり増加

6月になり、全国的にコロナの感染者数が微増に転じています。報道によると、6月19日から1週間の感染者数は全国平均で定点医療機関1ヶ所あたり6.1人で、5類移行前の3.4倍となっているそうです。6月の今治市内の1週間の発生数は、2.0～3.0人で推移しており、全国平均を下回ってはいますが、小児科の現場では子どものコロナもじわり増えてきている印象があります。沖縄ではすでに感染拡大により医療提供体制が逼迫しています。これを対岸の火事とせず、各自の判断で流行状況に応じて適切な感染対策をとるようにしましょう。



6月の感染症症情報

RSV感染症、ヘルパンギーナを含む夏風邪、感染性胃腸炎が流行の主体でした。アデノウイルス、溶連菌の散発的な発生もありました。

コロナは成人を中心に発生し、小児にも広がってくる気配があります。1医療機関あたりの1週間の発生数は2～3人でした。インフルエンザの発生は少なく、1週間あたりの発生数は1.0人以下でした。



6月の利用状況

6月の利用延べ人数は132名、1日平均利用人数は6.0人で、1カ月の利用人数としては開室以来過去最高となりました。年齢別では1歳児が67人で全体の半数をしめました。次いで2歳児の20人、0歳児の12人でした。疾患別ではやはり急性上気道炎が51人で最も多く、この中には夏風邪が多く含まれているものと思われます。次いでRSV感染症、ヘルパンギーナ、喘息性気管支炎が20人前後でほぼ同数となっていました。入室児は1歳児を中心に2歳以下の乳児が多くを占めており、6月は2歳以下のお子さんの感染が多かったことがわかります。これからの季節は熱中症にも注意が必要です。コロナも心配ですが、年齢が低いお子さんへのマスク着用は極力控えるようにしましょう。